

# 『徒然草』「第一部」と光源氏

中野貴文

「徒然草」は、なぜあのような内容であったのか。非常に単純だが、それ故に極めて難しい問いかけから拙論をはじめたい。従来この問題は、改めて議論されることもなかったか、あったとしても、全て兼好の思想へと還元されて論じられてきた。書き手の思想をアプリアリのものとして想定し、我々は「徒然草」を読むことで、それを再現しようと試みてきたのである。例えば、第何段のかかる記載からして、兼好はこういう考えの持ち主だったはずだ、といったように。

だが、果たして兼好は、伝えたい中身を最初から確固として用意していたのだろうか。事はむしろ逆で、彼は筆を進める過程で、書くべき内容を導いて来なければならなかったのではないか。

稿者は以前より「徒然草」について、特に冒頭から三十数段までのいわゆる「第一部」を、兼好が「見ぬ世の人」に宛てて書き記した「消息」のようなテキストと定義し、その性格を考究してきた<sup>(1)</sup>。詳しくはそれら前稿に譲るが、兼好には、例えば芸道の宗匠たちのように、テキストを伝えるべきこれといった子弟もいなければ、伝えるに値する知見も持っていなかったと想像される。とりわけ「第

一部」においては、例えば男は下戸でない方が良いとか、性欲には抗いたいなど、多くは「凡庸」<sup>(2)</sup>な私見が繰り返されるばかりで、敢えて兼好が書かなければならないものなど皆無に近い。似ていると言われる「枕草子」と比べても、

宮の御前に、内の大臣の奉りたまへりけるを、「これになにを書かまし。上の御前には、史記といふ文をなん書かせ給へる」などのたまはせしを、「枕にこそは侍らめ」と申ししかば、「さは得てよ」とて、賜はせたりし……。

〔枕草子〕三巻本・跋文<sup>(3)</sup>  
中関白家の栄光を目の当たりにし、中宮自らに執筆を薦められたとまで述べる清少納言と兼好の差は、我々の認識以上に隔たっていると見なければなるまい<sup>(4)</sup>。

「つれづれなるままに」と書きおこしたとき、この書記行為を成立させる根拠を、兼好は探さなければならなかったろう。『徒然草』の内容は、その根拠によって規定されたものではなかったか。結論を予測的に述べれば、この「つれづれなるままに」という書き出し自体が、根拠の一つだったと思われる。かかる仮説を検討すべく、まず、第十一段から読み直したい。

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りにしに、遙かなる苔の道を踏み分けて、心ほそく住みなしたる庵あり。木の葉に埋もる、懸樋のしづくならでは、露音なふ物なし。閑伽棚に菊、紅葉など折り散らしたるは、さすがに住む人のあればなるべし<sup>(5)</sup>。

右に挙げた「徒然草」第十一度は、教科書などにも採り上げられることの多い、よく知られた話である。同段は「大方、家居にこそ、事ざまはおしはからるれ」と説く第十段に続く位置にあり、「さすがに住む人のあればなるべし」と見えるように、人里離れた寂しい土地であっても、住む人の存在によって庵は清閑な美しさを保つものなのだという感慨が述べられている。

周知の通り、この直後に兼好は嚴重に警戒・包囲された柑子の木を発見し、微笑させられるという結末が待っているわけだが、前段とのつながりの巧みさも加わって、非常によくできた話に仕上がっている印象が強い。そのためこの段に関しては、はやくに橋本一氏が、技巧的で真実味に欠けるとして、架空の話である可能性に言及している<sup>(6)</sup>。

これに対し福田利徳氏は、同段が「全くの架空譚とは思わないし、これに類似した体験はあったであろう」としながらも、「この庵室へ行く道程や庵室の描写」等に関して、「そのまま記述通りとは思われ」ず、王朝の物語や和歌の言葉の持つイメージを利用した巧みな「虚構化」が行われていることを指摘した<sup>(7)</sup>。例えば、冒頭の「神無月の頃」という時間設定に於てから、

神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の始めなりける

〔後撰和歌集〕冬・よみ人しらず・四四五<sup>(8)</sup>

等の古歌以来の「晩秋から初冬に移り行く頃の、凋落にともなう寂寥の雰囲気を表出」<sup>(9)</sup>することを企図した可能性が高いとする。同様に「閑伽棚に菊、紅葉など折り散らしたる」についても、

紅葉やうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたるなど見たまひて……法師ばらの、閑伽たてまつるとて、からからと鳴らし

つつ、菊の花、濃き薄き紅葉など折り散らしたるもはかなけれど、この方の営みは、この世もつれづれならず、後の世は頼もしげなり。さもあぢきなき身をもて悩むかな、など思しつづけたまふ。

〔源氏物語〕「賢木」116<sup>(10)</sup>

という表現の影響を指摘し、かかる意匠によって「庵室は、一個の実在としての域を越えて、物語を背景にして、理想的な閑寂生活のシンボルとしての意味」<sup>(11)</sup>を付帯されると論じた。卓見と呼ぶべきであろう。兼好は自身の体験を、「源氏物語」などを引用することにより、再構成したのである。個人的な体験から、イメージに合う部分のみが残され、不必要な要素は改変・削除される。ならば、書き上げられた体験談は、いわゆる「作り物語」に接近するだろう。

道すがら、神無月二十日頃なれば、紅葉かつ散り、面白き所々御覽するに、小野といふ所に、小柴垣、遣水して、心殊なる家居のほどにて、時雨はらはらとしける。

〔海人の刈藻〕47<sup>(12)</sup>

神無月ばかりのことなるに、少将殿は嵯峨野わたりの紅葉御覽ありて、小倉の裾など心静かにながめ歩き給ふほどに、いとよしある小柴垣のうちに、耳馴れぬほどの琴の音ひびきあひて聞こゆ。

「紅葉」散る「神無月」の頃、都を離れた土地の清閑な「庵」に立ち寄り、そこに住まう美しい女君を見出すというのは、中世における物語の典型であった。したがって、右に挙げた表現が第十一段のそれと近似するのも、兼好がこれら物語の読者でなかったとしても、決して不思議なことではあるまい。知られるように平安後期以降、数多の物語が書き記され、読み継がれた。それらの物語は「源氏物語」などの表現を大量に引用することで成立しており、王朝古典の世界を理想とし、自らのテキストに積極的に取り込もうとする姿勢において、「徒然草」と中世王朝物語の距離は思いのほか近い<sup>③</sup>。

このように見たとき、第十一段に描出された庵の主が、必ずしも隠者のものと限定されない可能性も浮上しよう。無論、既に出家していたであろう兼好にとって、同じく世を捨てた者の草庵は興味を惹かれるものであったと想像され、先行注釈書・研究論文なども、これを出家者のものとする見方が多い。

しかし、兼好が出家者であったことはテキスト外部の情報に過ぎない。いったん兼好の筆になるといふ情報を捨象した場合、すぐ後で述べるように、序段から第十一段まで、さらには「第一部」全体において<sup>④</sup>、出家者の文章としての性格をさほど色濃く見出すことはできない。むしろ「神無月」の頃、偶然「ある山里」に「風雅な」「庵」を見つけるといふ言葉の流れから浮上するのは、物語よろしく、何かしらの事情でわびしい山里住まいを余儀なくされた女、あるいは「賢木」に見える如く、参籠のため遠出した男の姿ではあるまいか。

「徒然草」に関して、我々は書き手のことを知り過ぎていたので

はないか。兼好は確かに遁世者であったが、第一段を

いでや、この世に生れ出では、願はしかるべきことこそ多かれ。と、俗世を生きる人としての理想を説くことから語りはじめ、続け

ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、又有職に公事の方、人の鏡ならむこそ、いみじかるべけれ。(第一段)

いにしへの聖の御世の政をも忘れ、民の愁へ、国の損なはる、も知らず、よろづにきよらを尽くしていみじと思ひ、所せきまましたる人こそ、うたて思ふ所なく見ゆれ。(第二段)

のように、官人のあるべき姿を口説きたてる「第一部」は、あくまで在俗の者の視点から書かれていることを看過すべきでない<sup>⑤</sup>。既に述べた通り、第十一段は実体を希薄化し物語化する筆の意匠が施されているのであり<sup>⑥</sup>、直前の第十段に

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入たる月の色も、ひときはしみぐと見ゆる……木立物古りて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簞子、透垣たよりをかしく……。

と見える如く、この庵も「よき人」の「住みな」すものぐらいに理解しておくのが、ひとまず稗当であるように稿者には思われる<sup>⑦</sup>。

## 二

さてここで、兼好が理想の閑居のイメージとして、「賢木」を用いていることにこだわりたい。兼好が「源氏物語」の熱心な読者であったことは言うまでもないが、それにしても、なぜことさら「賢木」のあの一節が選り採られたのか。

この場面は、庇護者であった父桐壺帝を失い、藤壺との関係もままならず、公私全てにおいて停滞を余議なくされた光源氏が、所在ない気持ちで紅葉狩りや仏事で紛らわすべく雲林院に参詣した場面である。実は、この後の第十七段においても

山寺にかきこもりて仏に仕まつるこそ、つれづれもなく、心の濁りも清まる心地すれ。

と見え、同じシーンが踏まえられていると考えられる。前掲の第十一段といい、兼好は「賢木」のかの一節を愛読していたと見て間違いない。とりわけ注目したいのが、この「賢木」の場面における源氏の姿を、兼好が理想的なものとして捉えていたと思われる点である。次に挙げた、第五段を見られたい。<sup>100</sup>

不幸に憂へに沈める人の、頭おろしなど、ふつ、かに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門鎖しこめて、待つこともなく明かし暮したる、さる方にあらまほし。

頭基の中納言の言ひけん、配所の月、罪なくて見んことも、さもおほえぬべし。

逆境にある人の身の処し方を論じた章段である。ここで兼好は、短慮を起して一気に「頭おろし」、すなわち出家してしまうのではなく、「あるかなきかに」閑居に身を置くのが良いと述べているわけだが、ここには「賢木」における源氏の姿を彷彿とさせるものがあるだろう。例えば

年かへりぬれど、世の中いままめかしきことなく静かなり。まして大將殿は、ものうくて籠りたまへり。

(「賢木」100)

とある如く、沈淪する源氏は出仕もせず引籠る一方で、前掲の雲林院参籠の際にも、

律師のいと尊き声にて、「念仏衆生摂取不捨」と、うちのべて行ひたまへるがいとやらやましければ、なぞやと思しなるに、まづ姫君の心にかかりて、思ひ出でられたまふぞ、いとわるき心なるや。

(「賢木」117)

出家を実行することは、まだ幼い紫の上の存在もあり躊躇している<sup>101</sup>。そしてこのような状態の源氏を、物語は

軽々しき御忍び歩きも、あいなう思しなりて、ことにしたまはねば、いとのとやかに、今しも、あらまほしき御ありさまなり。

(「賢木」103)

むしろ「あらまほし」いものと評しているのだ。兼好は、この語り手と同じ感想を抱いていたと見て良いだろう。

出家せぬまま俗世から身を退く、このような源氏の感覚は須磨・明石から戻った後も継続しており、「薄雲」の巻では、齋宮の女御にむかつて次のように述べる。

今は、いかでのどやかに、生ける世の限り思ふこと残さず、後の世の勤め心にまかせて籠りあなむと思ひはべる……。

(「薄雲」461)

これなどは『徒然草』第四段が想起されるだろう。なお同段は、正徹本などを読む限り、本来第五段と切れ目なく連続する一つの段であったと思しい<sup>102</sup>。

後の世のこと忘れず、仏の道うとからぬ、心にくし。(第四段)

さらに第五段に関しては、末尾の「頭基の中納言の言ひけん、配所の月、罪なくて見んことも、さもおほえぬべし」という一文も注意されよう。「配所」すなわち流刑地の月を無実にもかかわらず見るといふ屈折した表現により、風雅な隠遁生活への憧れを言い表し

たものと思われるが<sup>四</sup>、この「罪なくて」「配所」にあるという点においても、須磨へ流された源氏が思い起こされてくるだろう。事実、娘を源氏にと願う明石入道の

罪に当たることは、唐土にもわが朝廷にも、かく世にすぐれ、何ごとも人にことになりぬる人のかならずあることなり。

〔須磨〕211

という言に對し、「河海抄」は

野相公・在納言・首家・西宮左府・帥内大臣以下拔群ノ賢才、罪

無クシテ配所ノ月ニ赴ク人、勝ゲテ計フベカラズ<sup>四</sup>。

という注釈をつけている。この頭基の逸話の引用に関しては、「頭基への兼好の共感は明らかだが、少しもそれが論理的に記されず、いきなり「さも覚えぬべし」と言われても、健康な読者は困ってしまうだろう」<sup>四</sup>という三木紀人氏の指摘の如く、当該段における位置づけがはっきりしないことなどが言われてきたが、流謫の身にあった源氏のイメージを梃子として導き出された可能性もあるのではない<sup>四</sup>。

以上のように、第四・五段、第十一、第十七段と、「徒然草」の「第一部」には、「賢木」から「須磨」にかけての、沈淪・失脚した光源氏の姿が揺曳していると考えられる。果たして、それはなぜなのであろうか。

強いて単純に答えれば、兼好は「源氏物語」に通じていたから、あるいは兼好は源氏を理想の男性と捉えていたから、などと考えることもできるだろう。確かに

よろづにいみじくとも、色好みならざらむ男は、いとさうぐし  
く、玉の盃の底なき心地ぞすべし。 (第三段)

の如き、読む者に源氏を想起させずにはおかない言の存在は、この考えを裏付けてくれるかもしれない。しかしながら、これだけではなぜ「賢木」から「須磨」なのかという点が、十全には説明できないであろう。加えて、兼好がそういう考えの持ち主だったからと、全てを書き手の思想に還元するばかりではなく、あくまでもテキストとしての必然性が問われなければならないはずである。

### 三

そこで稿者が注目したいのが、「賢木」から「須磨」辺りにおいて、「つれづれ」に筆を執る源氏の姿が目につくことである。

まずは「賢木」から、雲林院に籠つても結局は都のことが忘れられず、紫の上に宛てて消息を記す場面である。

例ならぬ日教も、おぼつかなくのみ思さるれば、御文ばかりせし  
げう聞こえたまふめる。

行き離れぬべしやと試みはべる道なれど、つれづれも慰めがた  
う、心細さまさりてなむ……。 (賢木)117

続いて須磨への流謫後、都に残してきた女君たちへ向け、源氏は手紙をしたためる。

尚侍の御もとに、例の中納言の君の私事のやうにて、中なるに、  
「つれづれと過ぎにし方の思ひたまへ出でらるるにつけても……。

〔須磨〕189

御返り書きたまふ。言の葉思ひやるべし。「かく世を離るべき身  
と思ひたまへましかば、おなじくは慕ひきこえましものをなと  
む。つれづれと心細きままに……。 (須磨)195

そして、書簡の往復も一段落した後は、沈みがちになる心を励ますべく、

いとかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらむと思せば、昼は何くれと戯れ言うちのたまひ紛らはし、つれづれなるままに、いろいろの紙を継ぎつつ手習をしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などにさまさまの絵どもを書きすさびたまへる……。

〔須磨〕199

今度は手紙ではなく「手習」、すなわち和歌を心の赴くままに紙に書き付けるなど、戯れの書記行為を行っているのだ。

実のところ、『源氏物語』全体をひもといても、「つれづれなるままに」筆を執ることは必ずしも多くない。例えば「雨夜の品定め」がそうであったように、無聊を慰めるのは、得てして気の合う者同士による語らいであった。この他、物語を読んだり、楽器を弾いたりといった描写は散見するものの、無聊であるが故に何かを書く場面は、決して多いとは言えないのである。

それに対し、「賢木」から「須磨」にかけての源氏は、桐壺帝という後ろ盾を失い、蟄居・流罪の身であった。心慰める恋人・友人と遠く離れざるを得ず、結果その手は筆に伸びるわけだが、この、引き籠った男性官人が「つれづれ」に「筆を執る」という点において、執筆する兼好の脳裏に源氏が存在が呼び起こされたのではあるまいか。言うまでもなく、『徒然草』は、無聊故に筆を執ると宣言してはじめられた営みであった。

もちろん、出家をためらっていた（加えて、物語中の登場人物に過ぎない）源氏に対して、兼好は『徒然草』執筆時には既に出家を果たしていたことが知られており、両者の間には明確な懸隔が存在する。しかしながら、第一節で触れた通り、「第一部」の筆は俗人

の視点からなされていることを看過すべきでなく、そして何より、歴史的実体としての兼好と『徒然草』というテキストの表現主体とを、即時に同一視すべきではあるまい。

仮に出家者兼好という実体にこだわるのであれば、そもそも出家者が筆を執る、それも経典の注釈や仏教説話集ならいざ知らず、隠者・出家者の自己表現ということ自体、矛盾した「本来あつてよいものではない」ことが考慮されなければならないだろう。兼好は、『徒然草』執筆という根拠なき営みのレゾンデートルを探さなければならなかったはずである。自らの行為を何かにかこつけねばならなかったであろうし、またそうしなければ、筆を進めることはできなかったと思われる。

それ故に、「賢木」から「須磨」辺りの光源氏が、言わば「要請」されたということではないか。中でも、第十七段や第五段の如き「賢木」の巻を直截に想起させる言説は、引き籠るが故の無聊を筆で慰めようとする源氏の姿を前景化させることによって、結果的に、自身の執筆行為に対する兼好の弁明・自己肯定として機能している。

したがって、前述の「色好み」の称賛にしても、あるいは閑居を理想とする発想にしても、『徒然草』の内容を兼好の固有の思想として、一律に理解するべきではない。むしろ筆を執るにあたって、源氏存在への意識、書き手兼好の自己肯定の姿勢が、その後の内容を呼び寄せたと考えるべきではあるまいか。いったい人は、そうやって何か書くのではないか。

同様のことは、著名な序段にもあてはまるだろう。従来、かの「つれづれなるままに」を、我々は（謙辞であると同時に）執筆する兼

好の現況を描出したものと理解する傾向にあったが、「賢木」から「須磨」辺りにおける源氏と自らを被せる、テキストとしての「虚構」<sup>8)</sup>と見る視点を持つことも、今後必要となつてくるはずである。

## 四

かかる視点に立つて「第一部」を読み直すとき、次に挙げた第七段は極めて興味深い。

住みはてぬ世に見にくき姿を待ちえて、何かはせむ。命長ければ恥多し。長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。

そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に交はらむことを思ひ、夕の日に子孫を愛して、さかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみ深く、物のあはれも知らずなりゆくなむ、あさましき。

今井上氏はこの段について、「光源氏のありように、どこか重なるところがある」とした上で、「源氏物語」と同段に共通する白居易の影響を指摘している<sup>9)</sup>。具体的には、第七段後半に見える「夕の日に子孫を愛して」という表現は、『白氏文集』巻二「秦中吟」中の「不致仕」の一節に基づいている。

七十にして致仕するは 礼法に明文有り

何ぞ乃ち栄を貪る者 斯の言を聞かざるが如くする

憐れむべし八九十 齒墮ちて雙眸昏し

朝露に名利を貪り 夕陽に子孫を愛ふ

冠を挂けんとして翠綵を顧み 車を懸けんとして朱輪を惜しむ

金章に腰勝へず 僮僕して君門に入る……<sup>10)</sup>

この「不致仕」を含む巻二「秦中吟」は、諷諭詩に属する<sup>11)</sup>。諷諭詩は、厳しい政治批判を主としており、「不致仕」も、わが身の榮譽や子孫繁栄を望む余りに深く冠を脱いで官中から引退しようとならない老官僚を、見苦しいとして咎めるものである。今井氏によれば、この一節を引用した表現が『源氏物語』中に多数認められる。ここでは、二例ほど挙げておく。

「御息所の忌はてぬらん。昨日今日と思ふほどに、三年よりあなたのことになる世にこそあれ。あはれにあちなしや。夕の露かかるほどのむさぼりよ。いかでこの髪判りて、よろづ背き棄てんと思ふを、さものどやかなるやうにても過ぐすかな。いと悪きわざなりや」とのたまふ。  
〔夕霧〕457

内幕などにも、ことなるついでなきかぎりは参らず、朝廷に仕ふる人ともなくて籠りはべれば、よろづうひうひしう、よだけくなりてはべり。齢などこれよりまさる人、腰たへぬまで屈まり歩く例、昔も今もはべれど、あやしとおれおれしき本性に添ふものうさになむはべるべき」など聞こえたまふ。  
〔行幸〕277

右に挙げた「夕霧」の一節などからは、官職に拘泥せず、世俗との交わりを避けて引き籠る源氏の姿が看取されるが、それは前掲第五段で兼好が理想としたものと同じの姿勢と言えよう。「行幸」の巻において、「不致仕」を下敷きに政治が面倒になったと嘯く源氏は時に三十七歳であり、憶説を述べるならば、第七段の「長くとも、四十に足らぬ」云々は、源氏の転機とも呼ぶべき四十という年齢設定が意識されているかもしれない<sup>12)</sup>。

だが、かかる思想の近似性と並んで重要なのは、「夕顔」「行幸」

ともに源氏自らが「不致仕」の一節を口ずさみ、その享受者であったことが示されている点である。兼好は、白氏の詩句を嗜む源氏に、同じ嗜好の者として共感し、自らを重ねたのではないだろうか。源氏が漢籍に通暁していたのは当然だが、物語中には、無聊を漢籍で慰める描写も見える。例えばかの「雨夜の品定め」において、座談の始まる前、

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近く書どもなど見たまふ。

〔箒木〕55)

源氏は「つれづれ」を、ひとり「書」を読むことによつて慰めていた。

そして兼好もまた、漢籍、中でも白居易を愛好し、それに慰みを求める者であった。

ひとり灯の下にて文を広げて、見ぬ世の人を友とする、こよなく慰むわざなり。

文は、文選のあはれなる巻々、白氏の文集、老子の言葉、南華の篇。此国の博士どもの書ける物も、いにしへのはあはれなること多かり。

〔第十三段〕

「雨夜の品定め」の源氏は、第十三段のモデルと見て外れないだろう。兼好はここでも、光源氏の如くに振舞っているということではないか。

なお、これと同種のごとは、第五段で名前の挙がっていた源顕基にもあてはまる。前掲「配所の月」の逸話の典故とも言われる<sup>64)</sup>、「発心集」の一節を挙げる。

中納言顕基は大納言俊賢の息、後一条の御門に時めかし仕え給ひ

て、わかうより司・位につけて恨みなかりけれど、心は此の世のさかえを好まず、深く仏道を願ひ、菩提を望む思ひのみあり。つねのことくさには、彼の楽天の詩に、「古墓何世人。不知姓与名。化為路傍土。年々春草生」といふことを口づけ給へり。いとみじきすき人にて、朝夕琵琶をひきつつ、「罪なくして罪をかうぶりて、配所の月を見ばや」となむ願はれける。

〔卷五―八「中納言顕基、出家・龍居の事」〕<sup>65)</sup>

源氏同様「此の世のさかえを好まず」、白氏を愛好していたことが確認できるだろう。顕基が愛唱した「楽天の詩」とは、これも『白氏文集』巻二、諷諭詩「続古詩十首」中の「第二」の一節であり、同じ一節を兼好もまた「第一部」後半の第三十段において、

さるは、跡とふわざも絶えぬれば、いづれの世の人と、名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらむ人はあはれとも見るべきを、はては風にむせびし松も、千年を待たで薪に碎かれ、古き塚はすかれて田と成りぬ。

と引用している。

源氏と顕基との共通項としては、白居易の諷諭詩を愛唱し、恬淡として栄達を望まず、故に早々と官職を辞し、後世を常に心にかかけつつ、無聊を文事によつて慰める隠遁文人、くらいになるだろう。無論、源氏も顕基も、かかるイメージのみに収まりきる存在ではなく、また「徒然草」のようなテキストを書き残したわけでもない。だが少なくとも兼好は、如上のイメージにすぎること自身書記行為を推進したと想像されるのである。

そしてこのことは同時に、若くして隠者となった自らを、肯定することにもつながっていたであろう。遁世した兼好の日常が、本当

に「つれづれ」であつたかは不明としか言ひようがない。ただ、「つれづれなるままに」と書き出したとき、彼は清閑な庵の中に恬淡としてある遁世文人の姿を、自らに重ねることができたはずである。兼好が第十一の庵の主に幻視したのも、あるいはそういう姿だったのであるまいか。

### おわりに

以上、「賢木」から「須磨」にかけて、政界を失脚し、無聊に筆を執る源氏のイメージに寄り添うことで、兼好が『徒然草』を書き進める根拠としたのではないかと、仮説を提示、検討した。確かに「第一部」の諸章段は、兼好自身の思想が開陳されたものに違いない。しかしながら、日々様々な思念を重ねていたのである兼好において、なぜそれらが優先して（しかも、あのような表現によって）書き記されねばならなかったのか。蓋しそれは、沈淪する源氏の姿を借りることで、『徒然草』が書き進められたが故であつたらう。よく言われる「第一部」の「詠嘆的無常観」とは、「賢木」辺りの源氏の憂愁に近いように、稿者には思われる。

なお、本稿は「第一部」に限って分析を加えたものであるが、『徒然草』の殆ど全体を占める、いわゆる「第二部」への検討が欠かさないことは言を俟たない。「第二部」においては、「賢木」の源氏のような特定のイメージに収斂する言説の存在は認めたい。いったい筆を進める兼好を支えたものは何であつたのか、後考を期すこととしたい。

注(1) 『徒然草』「第一部」の文学史的性格について(『国語と国文学』

平成十六年九月号)、『徒然草』における対話―「第二部」論にかえて―(『国語と国文学』平成十七年四月号)、『心構えの重視―『徒然草』のディレクタンティズム―(『国語国文』平成十八年七月号)。

(2) 三木紀人「随筆―徒然草をめぐる―」(『解釈と鑑賞』(昭和四十四年三月号))

(3) 引用は「新日本古典文学大系」によるが、表記等、一部私に改めた箇所がある。他の古典引用においても同様である。

(4) 清少納言と兼好との懸隔については、荒木浩「『徒然草』というパースペクティブ―第一段・第一九段、塚本「枕草子」―あづま・「都」(『新しい作品論』へ、『新しい教材論』へ『古典編』3(『右文書院』平成十五年一月)に詳しい。

(5) 『徒然草』の引用は、全て『新日本古典文学大系』による。

(6) 「正註つれづれ草通釋」(瑞穂書院、昭和十三年四月)

(7) 『徒然草論』(笠間書院、平成二十年十一月)第一章第二節「徒然草」の虚構性」

(8) 引用は「新編国歌大観」による。

(9) 稲田前掲書第一章第一節「徒然草」における兼好のジャンル意識―  
 (10) 引用は「新編日本古典文学全集」により、引用箇所の頁数を示した。

(11) 稲田前掲書第三章第二節「徒然草」の草木をめぐる(下)

(12) 『海人の刈藻―しのびね』の引用は、『中世王朝物語全集』(笠間書院)により、引用箇所の頁数を示した。

(13) 桑原博史「徒然草の源泉―物語」(『徒然草講座 第四巻』(有精堂、昭和四十九年十一月)も、「徒然草」の語句が、『源氏物語』のそれと共通して、物語の雰囲気をかもし出している章段を形成しているというのは、中世における、『源氏物語』享受の一般的なあり方とまったく共通している―と指摘する。

(14) 『徒然草』全体を見ても、「仏菩薩への信仰も、極楽浄土も語られ

て」おらず、「尋常な宗教的述作を読みつけた人にとつてはなじみにくいものだった(三木紀人「兼好と『徒然草』」(鑑賞日本の古典 方丈記・徒然草) 尚学図書、昭和五十五年二月)」であろう。

(15) 宮内三二郎「第二篇第二節『徒然草』増鏡新見」(明治書院、昭和五十二年八月) 第二篇第二節(序)第三〇段)の成立は、「このようにみえてくると、第一部執筆当時の作者の眼は、もっぱら宮廷と宮廷人・宮廷生活に向けられていたことがわかる」とした上で、『徒然草』「第一部」の執筆時期を兼好の出家以前の、「たとえ現に宮中に在動中でないにしても、すくなくともそれをあまり遠ざからぬ時期に物した」と考えたい」と論じている。興味深い見解だが、後節でも述べるように、むしろ出家者であつたからこそ在俗官人の視点が要請されたということではないか。

(16) したがって、例の「柑子の木」が兼好に与えた失望とは、この現実的な存在が、一つの美的・物語的世界を突き破ってしまったことによるものであつたらう。小島孝之「草庵文学の展開」(『岩波講座日本文学史 第五卷 一三・一四世紀の文学』(平成十一年十一月)も、「兼好はこの草庵の主の心のありかたを直接批判しようとしているのではなく、草庵が一幅の絵として完成していることを期待しているのだということがわかる。ここからは現実の生活感排斥されている」と述べる。

(17) 稲田前掲書第二章第一節「徒然草」と「源氏物語」は、この「住みなす」や第十一段に見えた「折り散らす」などの表現が、他の王朝古典には見出しがたい、「源氏物語」特有のものであり、兼好がこれらの特異な言葉遣いに鋭く反応し、「徒然草」に採り込んでいたことを闡明している。

(18) 第五段の解釈に関しては、戸谷三都江「顕基の説話と『徒然草』」(『学苑』第三九七号、昭和四十八年一月)、山村孝一「兼好の『あらまほし』と見ていたもの——『徒然草』第五段を読み解く——」(『大阪産業大学論集(人文科学編)』第一〇二号、平成十二年十月)など。

(19) 新枕後である紫の上が「姫君」とされる点に関して、高木和子「源氏物語の思考」(風間書房、平成十四年三月) 第三部第八章「光源氏の出家願望——『源氏物語』の力学として——」は、紫の上に対する光源氏の庇護意識を見出ししている。

(20) 山村前掲注(18)論文参照。なお、前掲注(1)拙稿でも述べたことだが、『徒然草』とりわけ「第一部」に関して、区分すること自体の妥当性も含めて、既存の章段区分に対する全面的な再検討が不可欠であるように思える。

(21) 三木紀人「配所」(『国文学 解釈と教材の研究』昭和四十八年七月号)、戸谷前掲注(18)論文、山村前掲注(18)論文等を参照のこと。

(22) 引用は「天理圖書館善本叢書」により、私に訓み下して示した。

(23) 三木前掲注(2)論文

(24) 安良岡康作「徒然草全注釈 上巻」(角川書店、昭和四十二年二月)は、第五段の冒頭の「不幸に憂へに沈める人」という表現に關して、「明石」で光源氏の夢に現れた桐壺院の言葉、「(流瀆する源氏が) いみじき愁へに沈むを見るにたへがたくて(229)」との近似に言及している。

(25) 荒木浩「心に思うままを書く草子(上)——徒然草への途——」(『国語国文』平成元年十一月号)は、この「須磨」の一節などを挙げつつ、『徒然草』に「手習反古」と近い性格があると論じる。

(26) なお、「賢木」から「須磨」の源氏以外で、無聊を筆で慰める姿が繰り返して描写されるのが浮舟であつた。「徒然草」序段の「硯に向かひて」という表現が、「手習」の巻において、浮舟が速に出家した直後の一節、「ただ硯に向かひて、思ひあまるをりは、手習をのみたけきことにて書きつけたまふ(341)」の影響によるものと思われる点、荒木前掲注(2)論文、稲田前掲注(1)論文が指摘している。三木紀人「徒然草の成立」(『解釈と鑑賞』昭和四十五年三月号)。同論文は「隠者文学」について、「形容矛盾」「逆説的な存在」などとも呼んでいる。

(28) 三木前掲注(1)論文も、「なまじつか作者の姿勢を明確に告げている

新刊
紹介

- るかに見える、例の序段があるために、兼好の動機は不問に付されがちだが、序段から誰かが読み取る自照性は筆者の虚構かもしれない」と述べる。
- (29) 『源氏物語 表現の理路』(笠間書院、平成二十年六月) 結「闇に惑われぬ光源氏と「不致仕」の思想」物語の精神的基底——
- (30) 引用は『白氏文集』那波本により、私に訓み下して示した。
- (31) 白氏諷諭詩の本朝における受容の諸相等に関しては、太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』下巻(勉誠出版、平成九年二月)。
- (32) 後述する源頭基が出家したのが、三十九歳であったことも付記しておく。

徐淵巽著、伊藤好英・村上祥子訳  
『韓国演劇史——伝統と現代——』  
(二〇〇九年一月二〇日) 朝日  
出版社刊 三三〇頁 三八〇〇円  
+税)

序説 韓国演劇史の記述方法、1 「演劇に  
関する歴史」と「演劇の歴史」 2 伝統様  
式・近代様式・現代様式 3 現代劇、未来  
の演劇のために／第一篇 伝統篇、I クツ  
— シャーマンの演劇 1 クツ・クンノ  
リ・演劇 2 古代人と巫俗信仰 3 クルを  
挙げてのクンノリ(巫儀) 他 II タル  
チュム— 仮面舞踊劇 1 タルチュム・仮  
面戯・仮面劇 2 大陸系の影響 3 三国  
時代・高麗時代の仮面劇 他 III コクトウ  
カクシノルム— 流浪広大の人形劇、1 土  
偶・コクトウカクシ・トルミ 2 古代の立  
偶と人形 3 コクトウカクシノルムの成立  
他 IV 優戯— 道化劇、1 優戯・広大  
クツ・才談劇 2 三国時代・高麗時代の優

- (33) 「須磨」の巻においても、蟄居に際し、「かの山里の御住み処の具  
は、え避らずとり使ひたまふべきものども、ことさらよそひもなく  
ことそきて、またさるべき書ども、文集など入りたる箱、さては琴  
一つぞ持たせたまふ(176)」と見える。
- (34) 戸谷前掲注(論論文)
- (35) 引用は『新潮日本古典集成』による。
- (付記) 本稿は、日本学術振興会科学研究補助金(特別研究奨励費)に  
よる成果の一部である。
- (なかの・たかふみ／熊本大学)
- 戯 3 朝鮮時代の優戯 他 V パンソリ  
— 演劇的に構成された長い叙事歌、1 パ  
ンソリと唱劇 2 パンソリの成立 3 パ  
ンソリの名唱とトヌム(十八番) 他／第二  
篇 近代篇、I 新派調劇と大衆劇— 劇場  
文化の台頭、1 新派調劇の成立とスターシ  
ステム 2 翻訳劇から連鎖劇まで 3 新  
派調劇の変化と大衆劇の成立 他 II 唱劇  
と楽劇— 音楽劇の模索、1 唱劇・楽劇  
2 パンソリから唱劇へ 3 唱劇の展開  
他 III 写実劇— 植民地としての現実認  
識、1 新劇・リアリズム・写実劇 2 写  
実主義の系譜 3 写実劇の定着 他 IV  
プロレタリア劇— 政治闘争としての舞台、  
1 傾向劇、プロレタリア劇、左翼劇、革命  
劇 2 プロレタリア劇の土台と培養 3  
在日朝鮮人のプロレタリア劇 他 V 親日  
劇— 動員体制の宣伝道具、1 日帝の順応  
者たちの演劇 2 検閲から委託製作に 3  
日中戦争以後の劇界 他／第三篇 現代篇、
- I 写実劇、マダン劇、歴史劇— 民主化と  
産業化過程の省察、1 写実劇・マダン劇・  
歴史劇 2 一九六〇、七〇年代の写実劇  
3 一九八〇年代の写実劇 他 II 喜劇と  
才談劇— 笑いの貧困、1 喜劇と才談劇  
2 一九六〇、七〇年代の喜劇 3 風刺劇  
の発展 他 III 叙事劇と不条理劇— 時代  
性を浮き彫りに、1 叙事劇と不条理劇  
2 叙事劇の台頭 3 記録劇の成立 他 IV  
神話劇とクツ劇— その原形、1 神話劇、  
祭儀劇、クツ劇 2 崔仁勲の神話劇 3  
李康白の神話劇 他 V 残酷劇、参加劇、  
タルチュム劇、コクトウ劇— 開放的な舞台、  
1 多様な模索 2 残酷劇の台頭 3 一  
九八〇と九〇年代の参与劇 他 VI 唱歌、  
歌舞楽劇、ミュージカル— 新しい世紀の音  
楽劇として、1 音楽劇の領域 2 唱歌の  
演出 3 歌舞楽劇の展開 他